



Title	シラバスの内容を如何にして充実するのか
Author(s)	猪上, 徳雄; 岸, 道郎; 原, 彰彦; 阿部, 和厚
Citation	高等教育ジャーナル, 7, 1-7
Issue Date	2000
DOI	10.14943/J.HighEdu.7.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29709
Type	bulletin (article)
File Information	7_P1-7.pdf



[Instructions for use](#)

シラバスの内容を如何にして充実するのか

猪上 徳雄^{1)*}, 岸 道郎¹⁾, 原 彰彦¹⁾, 阿部 和厚²⁾

¹⁾北海道大学水産学部, ²⁾同大学院医学研究科・同高等教育機能開発総合センター

Practical Report for Improvement in the Contents of the Syllabus

Norio Inoue,^{1)**} Michio J. Kishi,¹⁾ Akihiko Hara,¹⁾ and Kazuhiro Abe²⁾

¹⁾Faculty of Fisheries, ²⁾ Graduate School of Medicine, Center for Research and Development in Higher Education

Abstract The members who participated in the Faculty Development (FD) program of Hokkaido University in 1998 have revised the syllabus booklet for the subjects in the Faculty of Fisheries, in order to present practical products on the basis of the FD program. This report deals with the processes from the collecting each syllabus through the editing of a booklet, and can be summarised as follows : 1) It is important for the preparation of a useful syllabus booklet that each faculty member concerned with lectures, laboratory work, and practical training should understand the importance of the syllabus. This step is also important for the next step, which is discussion of the curriculum in each Department or Faculty in relation to each teacher. 2) It is necessary for the editorial staff to elect several editorial and executive members who have promoted a better understanding about curricula and syllabuses in the FD workshop. 3) For improvement in the contents of the syllabus, the requisite information about contents or items in it is essential and must be explained in detail, and the qualitative extent of the syllabus will be clear under these conditions. 4) Because everyone will submit a syllabus manuscript to the editorial office by the deadline date, enough time in the schedule will be necessary for the arrangement of each syllabus. 5) Producing the syllabus at the end of the academic year should be avoided, because there are many official duties concentrated at that time.

(Received on August 16, 1999)

1. はじめに

北海道大学においても教育改善のための教育ワークショップ (Faculty Development, FD) が全学的規模で行われるようになり, 教育に対する教官の意識変化が起こり始めている。たとえば平成 10 年に開催された FD 研修 (98FD 研修) の報告 (阿部 1998) にみ

られるように, 「他学部の教官の考え方を知る機会が得られたことで有意義であった」という出席教官からの意見が多かったことから, 総合大学としての教官連携はまだ不十分であることが明らかとなった。そのためにも FD 研修の継続が望まれる。また, 北海道大学として開催した 98FD 研修を学部単位の FD 研修などへの展開といった方向に, 今後どのように生

*) 連絡先 : 041-8611 函館市港町 3 丁目 1-1 北海道大学水産学部

**) Correspondence: Faculty of Fisheries, Hokkaido University, Hakodate, 041-8611, JAPAN

かされていくのかが問われる。ぜひこれを生かして、学部内での教官相互の風通しもよくしたいものである。

水産学部からの98FD研修受講者は、学部単位のFD研修を直ぐ行うには準備期間が十分でない判断し、短時間でも対応が可能なシラバスの改訂を試みた。その途中経過は別に報告(猪上1999)したが、ここでは水産学部として統一した形のシラバス作りの実際を、作成準備段階から完成に至るまでを通してまとめた。今後のシラバス作りのための問題点などを提供するものである。

2. 授業内容一覧の改訂に向けて

平成7年度から平成10年度まで使用してきた水産学部のシラバス(専門教育科目のみを掲載した授業内容一覧)は、全学的な評価は低くワースト3にランクされているものであった(北海道大学点検評価委員会1998)。この授業内容一覧の中にはシラバスに盛り込まれるべき内容が十分に網羅されていなかったことへの評価である。単に授業内容の概要を記載したもので、「……について教授する」、「……を論述する」、「……を概説する」というものが主で、教官が学生に一定の内容を注ぎ込む方式で記載されたものが多く見受けられた。スペースはA4紙に3科目を載せるもので、一定枠内に収まる内容(300字程度以内)に制限して統一を計ったものである。平成7年度の全学的な学部一貫教育のスタートに合わせて作成したものであることから止むを得ない面もあると思われるが、他学部のものではシラバスであるための条件として必要な内容を何項目か含んでいることやその形式でホームページに掲載している学部もあり、単に学部一貫教育のスタートのみが理由でないことが窺える。学部単位ではそれぞれよく検討され、学部のスタイルが決定されていることがわかる。このことは、今まで水産学部で作成してきた授業内容一覧がシラバスとしての要件を満足させようと意識されたものでないことを示しており、したがって、授業等の担当者に、ある一定の働き掛けを行えば変更し得ることを示していた。

水産学部から98FD研修に参加した3名はどこかで上述のような点で共通の認識を持つに至ったことが、シラバス改訂に踏み切ることを後押ししたといえる。とにかくシラバス改訂の方向性は98FD研修から2日

後に決定された。

3. シラバス充実の必要性

シラバスの必要性は、本来学部での一貫性のあるカリキュラム(教育の計画書)に基づいて生じてくるものである。水産学部では全学的な学部一貫教育への移行と同時に学部の学科改組に伴う学科編成も変更になったことから、ある程度の継続性を含めたカリキュラムが組まれるのも止むを得ないことであった。強いて言うなら「教官ありき」からのスタートであったので、これを学生・教育中心の方向へ変更する必要に迫られていた。学生中心に記述されたシラバスを作成することで、単位不足で卒業できない学生や進級できない学生の問題も、ある程度は解消できる可能性もある。そこまでサービスする必要があるのかという意見も聞こえてくるが、大学への進学率が進学年齢層の48%近くになった今では打てる手は尽くさなければならない。何よりも学生の学習目的(一般目標)と到達目標(行動目標)が明確にされていなければならない。従来は教官が教える授業内容については本人に任された裁量であり、教官同士がお互いに何を教えているかを聞いてよいものかどうか迷うことが多かった。したがって、講義内容の重複していることも予想された。これは早急に解消しなければならないことの一つとして指摘されてきた。さらに単位互換性も、整備されたシラバスのあることが前提であり、シラバスとしての内容がすべて明確に記載されていることが要求される。また学生が外国に留学する場合、もしくは留学生を受け入れる場合には、一般に英文によるシラバス(国際レベル)が要求され、今まではその都度教務掛で対応していた。

以上のように水産学部は複数の面からシラバスを充実する必要性に迫られていた。また一冊の冊子としているのは、これらに対応しやすいことも一つの理由である。シラバスそのものは個々の授業についての解説書であるから必ずしも一冊にまとめる必要はないが(井下1999)、学部全体で一斉にシラバス体制を開始することが効果的であり、組織として責任を果たす上でも意義がある。すなわち大学では何をどのように教えているかという情報を公表する必要がある。教官相互に他の科目の内容を知ることが、今後学科のカリキュラムを考える上でも役立つこと

である。また、学生自身が学科を選ぶに当たって、自分の目指す学科はどのような講義内容で構成されているのかを知るための案内書としても大切な役割を持つ。

4. シラバス作成に向けて

前述のように平成7年度に作成した授業内容一覧は、シラバスであるための要件を満たさない形の原稿を集めて掲載したことに問題があった。一方、他学部のシラバスはシラバスとしての要件を多く取り入れて作成されていることが窺えた。したがって、シラバスを充実する必要性がある時代背景を十分に説明し、さらに記載すべき項目設定をすることがより良いシラバス作りに必須の要件であるといえる。

シラバスに網羅すべき事項、書き方などについては、既にセンターニュースに何回かにわたって掲載されている(阿部 1996a, 1996b, 1997)。しかし、これらを有効に活用するためにはよほど日頃それを書くことを意識していないと、忘れ去られてしまう可能性がある。また、「学業成績評価について 教官・学生によるアンケート調査」(北海道大学点検評価委員会 1998)に学部カリキュラムとの関連でシラバスを整備することの重要性は詳しく述べられている。これらの報告をシラバス作成に反映するべきであるが、実際にはどの程度参考にされているか明らかでない。その意味で、FD研修は水産学部の例のようにシラバス改訂やカリキュラム見直しなどを行うときとタイミングが一致すると非常に有効といえる。ここに日頃のFD研修が必要となる理由がある。

今回のシラバス作成においてはシラバスの要件として最低必要限度の解説を小冊子の中に取り込むことを考えた。しかし、使用する用語の中で一般目標(学習目標, 学習目的), 行動目標(到達目標)など一般的に受入れられ難い用語・概念もある。今回のシラバス作成ではこのような点に配慮が足りなかったため、案内小冊子では学習目標, 授業内容という用語を使用した。途中でそれぞれ学習目的, 学習内容という用語に変更することを各教官に案内して了解をとった。細部にわたる事前討議が不十分であった。

教官にとってシラバスには何を書けばよいのか、学生にとって出来上がったものを読んで直ぐに何が書かれているのが理解出来るという点を工夫する必要がある。学生の立場で書かれた実例は参考にな

る(阿部ら 1998)。

英語版シラバスも同時に整備しようとして、その旨案内小冊子に盛り込んだ。今回は日本語のシラバス充実に焦点を当てたので、英語版シラバスは概要または学習目的に相当する短いもので依頼したが、今後は当然国際レベルのものが要求される。

今回のシラバス作成に当たって特に参考としたのは、北海道大学の中で一番よく整備されていると評価されている北海道大学医学部カリキュラム(1998)であるが、さらにプラスアルファを目指した。それは【評価】の項についてである。出席, レポート, 定期試験を中心とした評価を行う記述にはなっているが、どの位の比率なのかが明示されていない。今回この点について、それぞれ何割位の比率であるかを記載してほしい旨の要望を出した(評価基準の明確化, 98FD研修)。

他学部のスタイルを見ると一般に1ページに1科目が割り振られているケースが多く、この方法は編集のしやすいことも事実である。これらは学部の単位が大きい場合は大切な条件となる。しかし、短く書きたい人や少し多目に書きたい人もいることも考えられたので、今回は長さを指定しないで本人の納得いく内容で書いてほしいと考え、シラバス記述の長い例と短い例を示した。水産学部では枠内に収める規制がかかっていたので、一度これを外して自由に書いてもらうチャンスと考えたからである。この方式では科目を連続して配置していくことになるので、編集に当たってはたいへん手間ひまのかかる作業になる。今回は各教官に全く新しいスタイルのシラバス原稿を依頼することもあり、編集側も労をいとわずこの方式を採用することにした。

【概要】、【学習目的】、【到達目標】、【学習内容】、【評価】、【参考書】、【備考】とシラバス内容を一通り網羅するものとした。かなり欲張った内容としたが、何年か後になって新たな項目を追加することをお願いするよりは今回無理をいって必要項目を盛り込んだ原稿を依頼した。このようなスタイルで取り敢えず案内を出して教官の反応を見ることとした。シラバスに網羅すべき内容および書き方に関しては98FD研修によるワークショップ体験と「学業成績評価について 教官・学生によるアンケート調査」の資料を参考に十分な内容を含んで、しかも飽きずに読んでもらえる程度とした。体裁としては13ページの小冊子とし、例示を多くした。

表1 教官に配布した小冊子の内容

1ページ目:	水産学部授業科目授業内容(シラバス)一覧の改訂について:依頼文
2ページ目:	北海道大学の学部別シラバスのワースト3の汚名返上を目指して;なぜシラバスの整備なのか
3-5ページ目:	どのような内容を記載したらよいのか
6ページ目:	シラバスとは?:センターニュースから引用(阿部,1998)
7,8ページ目:	メールで原稿を送信する時の例示
9-13ページ目:	シラバスの例示:6科目,主に医学部のものを引用(北海道大学医学部カリキュラム,1998)

表1のような内容の小冊子は12月23日に完成し各教官に配布する準備は完了した。

5. シラバス編集と教官からの反応

平成10年12月24日に教官全員宛にシラバス改訂のための原稿依頼の案内冊子を配布した。98FD研修を終えてから1カ月以内にここまでこぎつけることが出来たのは、98FD研修そのものが単なる講演方式をとらずワークショップ形式で行われ、何かを作って発表することに重きが置かれていることから来る成果である。もう一つ急いだ理由は平成11年度入学の新生に間に合わせたいことであった。一年遅れてもよいとなると、編集意欲は急速に薄れ、学生が講義に出席しない状態と同じになり兼ねないからである。

およそ表2のような日程で編集が進行した(平成10年から平成11年にかけての日程)。

締切日(土曜日)の前日(29日)までの提出率は専門教育科目数に対して41%、事実上の締切日(2月1日)までに66%となった。1月29日から2月1日の4日間の提出率は41%であった。締切日に集中することがよくわかる。シラバス作成に係る141科目のうちメールで提出されたもの128科目(91%)、フロッピーディスクで提出のあったもの9科目、プリントアウトによるペーパーのみでの提出2科目であった。また、講義を担当している助教授以上の教官では、82%の人がメールでの提出であった。未提出で連絡のなかった教官は2名であった。この科目については旧授

業内容一覧の概要のみで対応した。その旨は最終原稿依頼案内文に盛り込んでおいた。一回目の大幅な改訂にしては許される範囲かと思われた。年度末の多忙な時期にもかかわらず、この提出状況は満足すべきものと考えている。また、前述のように【評価】の基準を数値(%など)で示して欲しいという北海道大学としても初めての要望に対しては、実験、実習、演習、卒業研究を除いた科目では66%が、それらを含めると55%が何らかの形で評価基準の割合を明示していた。

これまで述べてきた経緯で問題となった点は締切日前後に原稿が集中するため処理が間に合わなくなることである。この傾向はあらゆる締切に見られる現象と思われ、これには時間で対処する以外に方法はない。編集に携わる者にとっては、メールが届くことで教官各位のシラバス作成に対する熱意が感じられたことが、次のステップへのエネルギーとなり、原稿締切から1カ月以内の短期間で印刷用原稿までこぎ着けた理由である。このようなシラバス作成の過程で見られた教官の熱意が、今後、学部単位のFD研修の実施に向かって結実することを期待する。

今回、原稿をメールで集めたが、送られてくる原稿の中で「(,)や(、),半角,全角のスペース及び半角,全角の数字」,また各自の使用ソフトでそのまま添付書類として送られてくる場合、「インデント/タブの設定」の違いによるズレなどの細かい点での修正に意外と時間を要したことも注意すべき反省点であった。原稿はテキストファイル形式で送信してもらったが、これらの解決方法を予め講じておくべきで

表2 シラバス編集の日程

11月 27, 28日	北海道大学FD研修(98FD研修)
11月 30日	シラバス改訂の決定, 準備開始
12月 24日	シラバス原稿依頼の案内冊子の配布(原則としてメールで原稿を受付け) この間使用ソフト, スタイルの決定
1月 7日	各学科長宛に学部・学科の学習目標の(原案に対する)加筆, 修正, 訂正の依頼
1月 19日	提出率: 13%; シラバス提出を忘れていた場合が考えられるので喚起のための案内(1回目) (英文アブストラクトの例文添付)
1月 30日	土曜日であるが締切日(メールで受付けるのでかなり有効と思われた。事実, 土, 日に発信されたメールが多かった)
2月 1日	提出率: 66%
2月 9日	学部・学科の学習目標の完成(学部長, 学科長)
2月 10日	提出率: 81%; 未提出の人への喚起のために教官全員に2回目の案内(2月15日を最終締切日とした) この間逐次提出のあったシラバスの整理を継続
2月 15日	提出のあったシラバス内容の確認を行う。「(,) や (、), 半角, 全角のスペース及び半角, 全角の数字」などの修正・統一を行った上で, 各教官宛にプリントアウトしたもので確認を依頼(19日まで)
2月 20日	この間, 教官に関わる箇所以外の表, 文案の作成完了 シラバス編集教官による文章の最終チェック完了
2月 22日	全体のスタイルチェック(PageMaker上で)
2月 25日	シラバス編集教官及びアルバイトによるページ割付けチェック
2月 26日	ページ毎の校正(アルバイトも含め, 素人の方が間違いに気づき易い)
2月 27日	シラバス印刷用原稿プリントアウト完了
3月 1日	原稿を印刷に回す
3月 13日	印刷完了(Syllabus 1999)

あった。また,使用するアプリケーションソフトも手探り状態で同時進行し,今回はPageMakerを使用したが決まりまで時間がかかってしまった。詳しい人が加わっているともう少しスムーズに進行したと思われる。

複数の教官で担当する科目, 学科の枠を越えて複数の教官で担当する科目, さらに卒業研究など学科として対応するものについても, 予め個々に依頼先を明確にしておく必要も感じた。原稿が集まれば後は時間との戦いになるので, いかに効率よく作業をこなせるかである。原稿集めから係わると, 同じ原稿を10回程度読むことになるので, 原稿の文章チェッ

クを担当する協力者がいれば効率的である。

シラバス編集期間中に教官からの問い合わせは2, 3あったが, 特に問題となることはなかった。教官側からの反応が少なかった理由を考えると, 学生中心のシラバス整備の必要性を感じつつ, 然るべき関連委員会等で企画・編集が行われるのを待っていたことが挙げられる。簡単にいえば誰かが責任者となることである。そして, 誰かに任せておけばよいということが生じないためにもFD研修が必要となる。スタイルを決めて「このようにしますのでご協力ください」ということで, それなりのものが今回出来たことは如実にそれを物語っている。したがって, 何を

どのように記載すれば良いかをはっきりと依頼文に明記し、さらに気が付いた小さなことでも注意書きにしておくことが大切である。これがその後の作業の進み具合に大きく影響する。同時期に説明会を開催することも有効と思われる。この説明会は、シラバスの中で学生中心の適切な文章表現など、内容の充実のために今後開催しなければならない。

今回のシラバス編集を通して特に注目されたのは、学科会議を開催して学科として対応したところがあったことである。学科カリキュラムの重要性を学科教官が共通の課題として認識する意味で、このような対応は他学科にも要望したいところである。それが学部のカリキュラム整備を通じた大学教育改善(岸浪ら 1999)へとつながるからである。

さらに今回のシラバス編集にあたって新たに取り入れたのは、学部・学科の学習目標を設定したことである。エルムの学園、学生生活の手引き、水産学部PRパンフレット、水産学部学生便覧などに表現されていたものを学部・学科として整理し、明確にしようと試みた。水産学部を卒業したときに、一人の水産学士としては何ができるようになっているのかを少しはしっかり文章として表現したものである。今後、水産学部でのアドミッションオフィス(AO)入試の導入に伴い、学部教官の合意を得ながら、この点はさらに明確に表現されなければならない。何をやりたい人が水産学部に入るのか、社会に対する説明責任として水産学部出身の学士は何ができるようになるのかを解り易く表現する必要がある。

大幅なシラバス改訂は、一度行えば後は少しの手直しでさらによく整備していくことが可能なので、最初の原稿依頼の時点で、シラバスに盛り込む内容を精査することでどのようなシラバスが出来るかが決まる。

今回は年度末、学期末で修士、博士論文の審査等が集中する時期と重なったこともあり、時間的余裕がなく窮屈であった経験から、できれば夏休みから秋にかけて作業が行えるように計画したほうがよい。今回、説明会の開催や各科目中での表現にまで十分に目を通すまでに至らなかった反省からである。

6. まとめ

北海道大学FD研修(1998)に参加した水産学部からの受講者は、その研修成果を何かの形で示すため

に専門教育科目のシラバスの全面的改訂を試みた。そのときの原稿集め、編集過程を通して以下のようにまとめることができる。

- 1) シラバス作成の前提としては、講義・実験・実習を担当している教官各自がシラバスの重要性を共通に理解することが必要である。このことは学科・学部のカリキュラムを検討する次のステップへとつなげていく上で重要である。
- 2) FD研修に参加してカリキュラム、シラバスに対する知識を深めた編集スタッフを揃える。
- 3) シラバス内容の充実のためには、シラバスに盛り込む内容等の詳細を丁寧に原稿依頼文中で説明する必要がある。この段階でシラバスの完成度は予測できる。
- 4) 原稿締切日前後に原稿が集中するので、日程に時間的余裕を持つ。
- 5) 学期末は学事関連の仕事が集中するので、シラバス編集作業は避ける。

今回のシラバス作成にご協力いただいた水産学部教官各位に心から感謝し、この資料が他学部のシラバス改訂を進めるうえでの参考になれば幸いである。

参考文献

- 阿部和厚(1996a)、「カリキュラムをめぐる用語と内容について(カリキュラム設計シリーズ1)」、『センターニュース』No. 8
- 阿部和厚(1996b)、「カリキュラムにおける“目標”の設定(カリキュラム設計シリーズ2)」、『センターニュース』No. 9
- 阿部和厚(1997)、「学習方略(カリキュラム設計シリーズ3)」、『センターニュース』No. 11
- 阿部和厚(1998a)、「シラバスとは何か?」、『センターニュース』No. 18
- 阿部和厚(1998b)、「特集:教育ワークショップ(FD)-21世紀における北海道大学の教育像をめざして、ワークショップを終えて-」、『センターニュース』No. 21
- 阿部和厚,小笠原正明,西森敏之,細川敏幸,高橋伸幸,高橋宣勝,大雄二,小林由子,山舗直子,大滝純司,和田大輔,佐藤公治,佐々木市夫,寺

- 沢浩一(1998),「大学における学生参加型授業の開発」,『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』4, 45-65
- 北海道大学医学部カリキュラム(1998),『医学とともに歩む』
- 北海道大学点検評価委員会(1998),「学業成績評価について(- 教官・学生によるアンケート調査 -)」,『来るべき新世紀に向けて』より抜刷
- 猪上徳雄(1999),「教育ワークショップへの参加と説明責任 - 水産学部のシラバス作り - 」,『センターニュース』No. 22
- 井下 理(1999),「第4章シラバスの意味と機能」,『大学力を創る:FDハンドブック』東信堂 62-72
- 岸浪建史,阿部和厚,植木迪子,濱田康行,新谷 融,徳永正晴,甲山隆司,徳田昌生,山本 強(1999),「学部教育改善とファカルティ・ディベロップメント」,『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』5, 37-41